

**加藤** 皆様こんにちは。コーディネーターを努めさせていただきます加藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

最初に本日のパネルディスカッションの進め方についてお伝えいたします。今日は4名のパネリストにおいでいただいておりますので、4名の先生方に順次続けてご発表をいただきます。フロアからのご意見・ご質問は4名のご発表の終了後、最後の討論の時間に頂きたいと思っております。どうぞご活発なご意見を頂戴いたしますようよろしくお願いいたします。



それでは早速始めてまいります。まず先ほど基調講演をいただきました本間博彰先生です。精神科医としての立場から震災後の学校についての心のケアについて、さらに補足も含めてお話いただきたいと思います。

本間先生よろしくお願いいたします。

---

### 長く続く震災後期の子どものケアと学校課題 ～定点観測として取り組んだ学校定期 巡回相談の経験から学校の課題を検討～

---

**本間** 基調講演が終わりましたので、ほっとしたところですが、12分間ほどお付き合いください。

私はこのパネルディスカッションでは、学校の課題ということについて、この4年半の間で知り得たこと、感じたことについてお話ししたいと思います。

私は、ずっと学校を訪問していて、学校はいろいろな可能性を持っていると思いました。その中で、特に驚いたのは、震災の後、数ヶ月、4、5ヶ月かな、子どもたちはすごく静かだったんです。問題もあまりなくて。それから夏休み明け頃から子どもたちはいろいろな不安定にな

ってきました。しかしながらそういう中でも、今回の東日本大震災がこれほど大規模な震災にも関わらず、他の国の震災の後の子どものPTSDとか、問題と比べると遥かに少なかったんですね。アメリカでは、30～40%の子どもたちが問題となっていました。日本の子どもたちはそこまでいかなかった。ではなぜいかなかったのか。それは先生方が3月11日の時に必死になって子どもたちを守ったんです。その後も先生方は子どもたちのケアをずっとしてきました。あの姿を子どもたちはずっと見ていたんです。そして、子どもたちはその先生方の姿を見て、安心感というものを得たはずなんです。そのことで子どもたちの心の問題がこれほど少なくて済んだのだらうと思っていました。

私は、気仙沼のある保育所の子どもたちをずっと何年かフォローアップをしています。その保育所は、津波火災があったりとか、被害が凄まじいところの子どもたちでした。その子どもたちはきっと大きな問題を持っているだろうということで、フォローアップをしてきました。そして、その子どもたちが入学した5校の小学校の先生方にいろいろ協力をしてフォローアップをしていきました。その子どもたちが3年半経った時点のPTSDはものすごく少ないんですね。なぜ少ないかと思ったのですが、それは、毎月その学校に行きますので、先生方もかなりその保育所の子どもに対しては注目をしてくれました。私に、随時「この子どもは今こんな問題がある」、「あんな問題がある」ということで報告をしてくれました。つまり、先生方の目が子どもに注がれていたんです。先生方の目が子どもに注がれるということが、たぶん子どもの心を支える大きなことだったと思います。そのような体験をして、私自身としては学校に対する思いを随分変えました。

そして学校を見ていきますと、やはり学校にいる時の子どもたちというのは元気なんです。明るいです。そして問題はあまり出しません。それは、先生方との関係です。先生方はどこの学校の先生方も必死になって子どもを守りましたし、子どものことにすごい配慮をしてきました。そのことで子どもたちが問題が出ないで済んだ、少なくて済んだ。しかし、家に帰ると子どもたちのいろいろな問題が出てしまう。今、被災地の子どもたちにとって、ご家族が安定するとか、立ち直るといのはなかなか望めませ

ん。そうすると学校にいる8時間が勝負所だろうと思ったんです。学校こそが被災地の中で子どもたちを救うよい場所であり、先生方の視線そのものが子どもたちを救うんだらうと思いました。



その中で、学校を見てみますと、子どもたちは行事があったり、いろいろな課題があると、それを目標にしてがんばります。学校というところは子どもたちにとって楽しみがいっぱいあります。行事もそう、勉強もそう、いろいろなものが楽しみの中の一つになります。それをどのように組み込んでいくかということが子どもたちにとってすごく大事なことだと思いました。

学校生活というのは、極めて当たり前の生活をするわけです。友達同士が切磋琢磨したり、時には傷つけ合ったり、時には支え合ったりします。いろいろなルールもあります。そして、学校に行くということは子どもたちが日常生活の基本的なことを学ぶわけです。その日常生活の基本を学ぶことが、先ほど言いましたレジリエンシーの一番大事なところなんです。日常生活をきちんとやれた子どもたちは精神的にどんどんどんどん成長していきます。そういうことを考えていくと、残念ながら不登校の子どもたちはそういう機会を逃してしまいます。しかし不登校じゃない子どもたちにとっては、日常生活をきちんと送れるような、そういう配慮ができるということがとても大事なことです。そこには気にかけてくれる先生がいますし、これから先も、どんどんどんどん乗り越えていくんだらうと思えます。

そして、もう一つ大事なこととして、子どもたちが先のことに関心が向く。先のことを予測できるということは人間の心の成長にとって大事なことです。今、防災教育とかいろいろな取

組がなされています。三陸沿岸部の子どもたちは、大きな地震がくれば津波がくるというのは頭の中に叩き込まれています。つまり、それは予測がつくということなんです。大きな地震がくれば、津波がくるんだ、津波がくるから逃げよう、自分を守ろうという予測ができます。そういう予測性がつくということが心の健康にとってもものすごく大事なことなんです。ですから、震災の後、防災教育とかいろいろなことをしていますが、それは子どもたちが自分の頭の中に予測性というもの、予測がつくという能力を身に付けているということだと思っています。それが大事なことだと思いました。

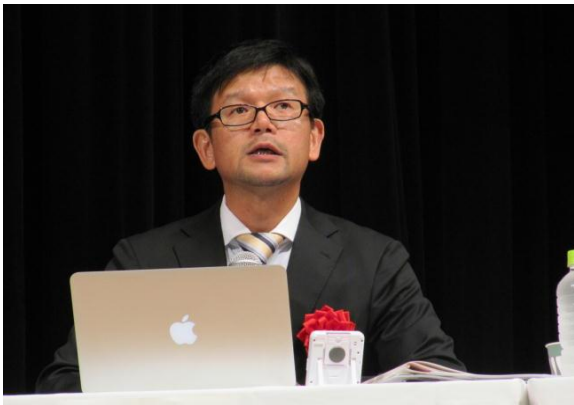
それから、もう一つ言いたいことがあります。先生方の疲弊ということがすごく心配になります。急性期には、先生方や支援者のメンタルヘルスという研修が結構ありました。急性期の頃のメンタルヘルスのテーマと慢性期、後期のメンタルヘルスのテーマとは少しずつ変わってきます。むしろ、慢性期の今の時期、後期の今の時期こそもう一度きちんとした先生方のメンタルヘルスのための、支援者のための心のケアというか、自分のメンタルヘルスを高めるようなことを、ぜひ学校で行ってほしいと思います。そのリーダーになるのが校長先生ですので、ぜひとも校長先生たちには他の先生方のメンタルヘルスを高めるにはどうしたらいいかということに取り組んでいただきたいと思います。そして、長期化するということが我々にとって大きな課題ですので、その長期化をどういうふうに乗り切るのかということでは、高橋教育長さんが言われたように、子どものメンタルヘルスも大事ですが、先生方のメンタルヘルスもすごく大事ですので、その両方が両輪となって教育現場でより健康な活動ができたらいいいと思います。ぜひとも先生方ご自身が、自分のメンタルヘルスのことを大事にしてほしいと思っています。また、どうやってそのバランスをとるかという点も大事になります。それが私が補足したいことです。以上です。

**加藤** 本間先生ありがとうございました。それでは次に、田端健人先生。先生には、教育に関する研究と実践の視点からご報告いただきます。

---

## 被災した子どもと教師のケア

---



**田端** 宮城教育大学の田端健人と申します。座ったままで失礼いたします。私は東日本大震災の学校現場の学校被害、教育復興について聞き取り調査を進めてまいりました。ここにご参加くださっている校長先生、教頭先生、それから教育委員会の先生方の中にもお話を伺わせていただいた方がおられます。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。発表としましては、お手元の資料をベースに少し補足しながら12分ほどお話させていただきます。

これまでの聞き取り調査、記録の読み取りからわかったことは、大変当たり前のことかもしれませんが、東日本大震災で子どもや教師が経験した恐怖、悲痛というものは想像をはるかに超えているということです。私が知るだけでも例えば、当日津波にさらわれて、翌日隣町で発見された小学6年生の女子児童がいます。その恐怖はどれほどのものだったのでしょうか。ほとんど、想像を絶しています。また、当時教員だった父親を避難中に亡くし、同じ悔しい思いを教師として二度と繰り返したくないと意を決して、父親と同じ教師の道を目指して勉学中の大学2年生もいます。さらに津波に自身も巻き込まれながらも奇跡的に生還したのですが、教え子や同僚を失い、新築の自宅も失い、ローンを払いながら、統廃合した被災地の中学校で奮闘し続けている先生もおられます。これはほんの一例ですけれども、それぞれが味わった苦しみ、悲しみはそれぞれに深く、且つまた千差万別です。

本日2015年8月11日、あれからちょうど4年と5ヶ月になりますが、この4年5ヶ月という歳月はこうした子どもや教師の心の傷を

少しでも癒したでしょうか。少なくとも、彼、彼女たちがあの時の恐怖や苦痛を忘れてたり、失った人やものを忘れたことは決してないでしょう。被災した子どもや教師の心的外傷の深さを思うならば、彼、彼女たちの多くが、先ほど本間先生がおっしゃられたように PTSD などの精神疾患を患うことなく、表面化させず、日々の学業や仕事をこなし、たとえ表面的であっても明るく元気に過ごしていることに、深い驚きと畏敬の念を感じないわけにはいられません。深刻な外傷を内に秘めた子どもや教師が前向きに日々を送ることができるのは、当人のがんばりはもちろんのこと、それに加えて周囲のケアや支えがあってこそでしょう。被災地の学校の聞き取りや見学を通してわかってきたのは、こうしたケアには大きく二つの種類があるということです。

一つは、カウンセリングなどの医療的な、専門的なケアです。それはたわいない雑談に耳を傾けることから、専門的なカウンセリングにまで至ります。私が知る限りでも、教育現場にはカウンセリングについての理解、連携がかなり浸透しています。20年前の阪神大震災以来、災害後のストレス症状についての理解と支援方法は、学校現場でも広く共有され、その手法も大変高度になっていると思われまます。専門医との連携も驚くほどよくなされているケースが多いですし、専門医も県内外から手厚くサポートしてくれています。こうした医療的ケアについてはフロアの他の先生方のお話のとおりだと思います。

もう一つ、私として強調したいのは、学習活動を含む文化活動に秘められたケア機能です。意外に思われるかもしれませんが、運動会とか学芸会などの学校行事、あるいはふるさと発見とかいった学習にはケア的な機能があって、被災した子どもや教師、ひいては保護者や地域住民を、暗にケアしていると考えられます。外傷を抱えながらも、それが表面化しない子どもや教師が大変多くいます。こうしたいわゆる普通に明るく日々を送っている子どもや教師にとって、あたりまえの学校生活や学習、中でもとりわけ力を入れる行事は、子どもや教師が外傷を受け止め、跳ね返していく力、いわゆるレジリエンス、弾力性とか、回復力とか快活さというふうに訳されますが、そういうレジリエンスの力を高めていると思われまます。運動会とか学芸

会は、どの学校でもドラマティックですし感動的です。ただ被災地の学校のそれは独特の奥深い感動をたたえていると思われます。被災地の運動会や学芸会や課外活動には、被災した地元まつわるものが多く見られます。例えば、「ふるさと発見学習」では、地元の自然に親しみ、地元の漁業や農業を体験的に学習します。運動会では、学校に代々伝わる和太鼓の演奏とか御神楽などの伝統芸能が盛り込まれ、一種の祝祭的な高揚感に包まれます。被災地ではご存知のとおり、保護者や地区住民は仮設住宅とか借り上げ住宅、復興住宅、再建した自宅に散り散りになって住んでいます。しかし、運動会や学芸会には、住民あげて参加し、かつての地元の自然と文化に思いを馳せ、地元の未来を思い、一体感を味わいます。「未来の〇〇まち物語」とか、「〇〇まち遍歴」といった地元をテーマにした演劇を上演するケースもあります。かつての地元は津波で破壊され、この破壊は深刻な外傷と連動していますので、地元をテーマにすることは精神的には、外傷への直面化、一種のコンフロンテーションです。外傷に向き合うことは、リスクも伴いますが、外傷と折り合いをつける重要なワン・ステップにもなります。こうした外傷の向き合い方、行事等とおした向き合い方は、従来の精神的な理解とはやや異なる特徴を持っていると思います。二つの特徴をあげたいと思いますが、一つには、自分の心の内面に向き合うというよりも、内面が関与した外の世界、地元の自然とか労働文化というものに向き合うという、一種の間接的な向き合い方である点に特徴があると思います。もう一点の特徴としては、自分一人でその外傷と向き合ったり、カウンセラーとともに向き合うだけではなくて、むしろ共に外傷を負った友達とか両親とか地域の複数の人々と一緒に、集団的なしコミュニティとして外傷に向き合う、外傷と連動する自然文化に向き合うという特徴を備えていると思います。これが心のケアに有効に働いているようなのです。これは今回の大震災後の学校行事を見る中で新しく気づかされたことです。

地元の自然や労働や伝統文化を学ぶという活動は一種の文化活動です。「文化」は英語の「カルチャー」ですが、この「カルチャー」という英語は「アグリ・カルチャー」つまり、「農業」とか「農耕」、これと一体化となった言葉で、

もともとは古代ローマ時代のラテン語「クルトゥーレ」という言葉を語源としていて、この言葉は「慈しみ、ケアする」という本来の意味を持っていました。「カルチャー」や「アグリカルチャー」にはもともと「慈しみ、ケアする」という意味が込められていたのです。

被災地の文化活動、とくに行事や「ふるさと発見」のような校外学習を見ていますと、この「カルチャー」が持つ、本来の「慈しみ、ケアする」働きを強く実感させられます。被災地の学校行事に触れると、子ども、教師、保護者、地域住民が一つのコミュニティとして行事に盛り込まれた地元を改めて文化的に耕し慈しもうとしていることがわかります。そして、こうした文化活動が、跳ね返るようにして、演じたり見守ってしたりしているコミュニティの構成員をケアすることになり、そのおかげで、子どもも教師もひいては保護者や地域住民も元気を取り戻しているように見えます。確かに教師はその土地の人間でない場合も少なくありません。しかし、そうした教師にとっても、教師としての大きな励ましと癒しは、目の前の子どもが明るく元気に成長していくことです。被災した地元の自然と文化を直視し、地元を誇らかに謳い上げ、強くたくましく生きていこうとする子どもの姿は、教師たちに希望と支えを与えているようです。つまり深く傷つき、長期にわたって疲労困憊した教師たちを支え、かつ癒しているのは、実は外傷を受け止め乗り越えていく、しなやかな、つまりレジリエントな子どものたくましい姿のように見えるのです。

では、被災して外傷を負った子どもたち、教師、さらには保護者や地域住民のために、被災地から離れた私たちにできることはなんでしょうか。被災地から離れた私たちが、少しでも力になれることはないでしょうか。このことを考えるためにヒントを与えてくれた、ある大学1年生の言葉を紹介したいと思います。その大学1年生は、東日本大震災発生当時、津波が襲来した沿岸部の学校にいて、当時中学2年生でした。彼自身間一髪で津波を逃れたのですが、その直後、津波にのまれて心肺停止状態になった地域住民を目にすることになります。彼は心臓マッサージをしましたが、その男性を助けることはできませんでした。その無念から、その少年は、将来の夢を消防士と決めました。現在消防士を目指して、福祉行政や救急救命を

学び、民間の防災士の資格をすでに所得しました。その彼は、こう語りました。「『出身どこ?』って聞かれて『南三陸』っていうと、『それどこ?岩手?』って周りに言われて…。県外の人ならまだしも、宮城県内の人にそう言われて、あんなにメディアで震災のことが取り上げられているのに、どうしてそんなに関心がないの?!って憤りを感じます。」この言葉からわかることは、あの時辛い経験をした人間にとって、周囲の人々があの災害を忘れること、あの災害に無関心になるということは堪え難い苦痛であるということです。被害の少なかった周囲の人々にとってあの災害がなかったことになってしまうことは、被災者の外傷にさらなる外傷を上塗りすることになると考えられます。ここから、被災した子どもや教師のために私たちにできることの一つが明確になるように思います。それはいわゆる温度差というものを解消し、風化に抵抗することです。大震災を忘れるのではなく、あのときの被害を繰り返し思い出し、心に刻み、何らかの行動に結びつけることです。震災のことを思い出して受け止め、行動に結びつける方法は複数あると考えられます。そして、その方法は人それぞれに異なるでしょう。

私なりの方法を最後に二つ紹介させていただきます。一つは先ほど紹介した少年のようにあの災害を受け止め、乗り越え生きている児童生徒を広くみんなで心から評価することです。このことは、そうした児童生徒を賞賛すると同時に、それを育てている先生方を間接的に評価することにつながると思います。もう一つは、東日本大震災のときに学校が果たした役割、また、果たしきれなかった課題を洗い出し、教訓として今後の大災害に生かしていくことです。試算では、あの災害で宮城県内の児童生徒の430名の命が奪われ、うち75名は避難がうまくいかなかったためであり、他は引き渡しの後、あるいは自宅や町にいて奪われた命でした。一方、校長や教頭のリーダーシップの下、地域住民との協力によって試算では2000名近い命が津波から守られました。校長先生たちは2000名近い命を守りました。内陸部の学校も、避難所として奮闘しました。最大で300人以上の避難者を受け入れた県内の小中学校は212校にも及びます。最大1000人以上を受け入れた学校も68校に上ります。こうした経験から課題や教訓を引き出し、今後の災害に生かすべ

く全国に発信することも、私たちは忘れていないという強いメッセージですし、被災地の子どもや教師を、離れた場所から粘り強く応援することにつながるのではないのでしょうか。

私の拙い発表は以上で終わりたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

**加藤** 続いて高橋総子先生からご提言をいただきます。先生にはスクールカウンセラーの統括の立場から、お話しいただきます。

---

### 子どもの心のケアのために学校ができること

---



**高橋** みなさんこんにちは。宮城県臨床心理士会でスクールカウンセラー担当理事をしております、高橋と申します。よろしくお願ひいたします。本間先生はじめ、他の先生方からいろいろとお話が出ましたので、重なるところはあまりお話ししないで私なりの提言というものをお話ししていきたいと思います。

スクールカウンセラーとしてこれまで多くの学校の先生方と関わってきましたが、震災後は先生方は本当に学校を日常に戻すためにあらゆる努力をなさってきたことと思います。学校に配置されているスクールカウンセラーからも、頑張っている先生方がとても疲弊されているのではないかと、という心配の声を多く寄せられました。本間先生もお話されましたように、幸いにして、と言いましょか、学校で被災をしたために、先生方に守られて、そして大切にされてきた子どもたちが本当に救われたのではないかと思います。

今年度は震災後5年目ということで、表面的な震災によるトラウマというものはない

えにくくなっているのですが、新たなストレスの蓄積というものが子どもに影響しているように感じます。子どもの状態が二極化し、格差が開いているようにも見えます。いろいろな環境の変化もありますが、心のケア支援チーム等で学校訪問をしていますと、気になるお子さんたちは親のゆとりがないために十分に甘えてこられなかった子どもたち、そして心配をかけたくないが無理に頑張ってきている子どもたち、不安定な大人たちを見て悩みを表現せずに我慢してきている子どもたち、そういう子どもたちがいろいろな行動として表現してきているなあと感じております。現在、小学生のほとんどは震災後には乳幼児だった子どもになっています。当時、小学校低学年であった子どもたちは中学校に進学しています。乳幼児だった子どもたちは言語化できない年齢でしたので、恐怖や不安といった、感覚として残っている部分が大変多いと思います。いち早く家族の適切なケアを受けられた子どもは回復が早いかもしれませんが、家族の状況が不安定な場合は回復には時間がかかります。学校の中でいろいろな症状、問題行動を出してくる子どもたちに対して、ただ問題行動だととらえるのではなく、震災と関連しているのではないかと必ず頭のどこかで考えていかなければいけないのだと感じます。

それから、県内県外からの転入生がたくさん学校のの中に入ってきております。今後も復興公営住宅等の整備に伴い、転入、転出するお子さんたちが増えていきますので、そういうお子さんたちが新しい環境になじめるように十分なケアが必要なのではないかと感じます。学校現場でも震災が風化してきていると危惧されるわけですが、先生方も、人事異動で被災体験のない教職員が異動してくるなど、状況も変化してきています。震災体験を語り継ぐこと、そして教職員や私たちスクールカウンセラーの研修を引き続き継続していくことが重要になっています。

子どもの震災当時の状況がなかなかわからないままに学校で子どもたちに向きあわなければならないということが今後も増えてくると思うのですが、子どもの健康調査票の作成がとても重要になっています。震災当時その子どもがどこでどのように被災をしたのか、その時の家族の状況はどうだったのかについて丁寧な聞き取りを行い記録しておくことがとても重要になって

いると思います。

資料には玉浦中学校の例を挙げさせていただきましたけれども、他にもこのような取組をしていた学校はたくさんあったと思います。心配な生徒を早い時期にスクリーニングする、危機対応におけるトリアージのようなものですが、そういうことをして心配な生徒をいち早く学校全体でケアしていく取り組みが大事になっています。ただ、それには大変なエネルギーと時間がかかると考えていると思うのですが、先生方のご負担をできるだけ増やさないで、学校の中で行うことを考えると良いと思います。

震災後は、すぐに心のケアという言葉が飛び交い、学校現場が不安に陥ったり、あるいは焦りを感じてしまったという報告もたくさん寄せられています。心のケアは特別なことをしなくてもこれまで学校でそれぞれ行ってきた健康調査、あるいは健康観察を少し丁寧に行うことで、可能になります。特に、今までの健康調査、健康観察に加え、少し震災体験の有無であるとか被災の状況についても項目を付け加える。そして、低年齢、低学年であればあるほど体の反応として出てきやすいものですから、体調についての調査も大事になってきます。それからそのお子さんが学校の中でどのように生活しているか、友だちとうまくやっていたかについて触れていけると実りのある結果が出てくるのではないかと思います。さらに、各学年でそのお子さんに対してどういう対応をしたか、どういう対応が必要だったか、あるいは良かった対応、こういうことをして良かったということを書いていく申し送りができる個人調査票が非常に今後は必要になると思います。さらに保護者へのアンケートを、1年に1回でも良いので実施すると良いと思います。特に新入学の児童生徒に対して、例えば11月頃に行う新入学児童の健康診断の時期であるとか、あるいは中学、高校の予備登校の時に、ちょっとした保護者向けのアンケートを行う。こういう時には全部の保護者が出席しますので、実施すると良いと思います。小さい子どもたちには訳のわからない恐怖や不安を抱えるのではなく、自分はどこで震災に遭い、その後どのように避難してきたのか、あるいはどこの学校に入学してどこの学校に転校したのかストーリーがわかるということもとても大事になってくると思います。その調査の結果を申し送りをすることが重

要になります。進級または進学の際に、情報を伝え小中高が連携して適切な支援を継続していくことが大切になってきます。それは中一ギャップを防ぐことにもつながっていきますし、子どもの様子を先生方が把握していることで、子どもの人間関係あるいはいじめ等の問題にもきちんと目を配ることができると思っています。

このように考えますと、これは何も被災した子どもたちだけではなく、全ての子どもにとって必要なことだと考えられます。緊急時の学校現場においては、やはり校長先生のリーダーシップのもとに混乱を防止するような指示系統を明確にした取組が必要です。それは心のケアについても同様で、校長先生がきちんと心のケアについて意識を持っていらっしゃると、早い時期に取組ができ、学校全体でサポートをすることが可能になっていきます。スクールカウンセラー、学校臨床心理士と私たちは言っておりますが、臨床心理士がこれまでも、事件・事故あるいは災害における緊急支援をずっと行ってきていますし、研修も重ねています。学校の中でそういう時にスクールカウンセラーができることはそんなに多くないと思いますが、むしろスクールカウンセラーの仕事というのは個別の対応よりは先生方のサポートをするのが主な仕事ではないかと感じます。先生方は子どもの様子を毎日見ているし、小さな変化にもすぐ気付くことができる強みを持ってるわけです。養護の先生は子どもの体のことから介入することができます。子どもは言語化が苦手なほど身体症状としてサインを出しますので、養護の先生が見逃さないということが効果があると思います。言語化することはとても必要なことなのですけれど、無理に話をさせようとしなくても、子ども自身は話しても大丈夫と感じた時に話し始めます。そういう意味で、子どもの心のケアは近くに安心できる、信頼できる大人が存在することがとても大事だと思います。スクールカウンセラーは先生方と情報を共有しつつ、子どもにとってどんな支援が必要かを一緒に考える役目ではないかと考えます。見立てをするということが大事な仕事になります。そのお子さんの症状とか訴えが病的なものであるか、あるいは外部機関につながなくてはならないものであるかをきちんと見立てることが主な役目になるのではないかと思います。スクールカウンセラーと先生と一緒に考えることが学校の中では大

事なことになります。学校の中で子どもを支援するときには目先のことでなくて、やはり将来を考えたビジョンを持つことがとても大事になります。子どもが回復するために、資料にも書きましたとおり、所属感・つながり・有能感・未来への目標について具体的にどのように支援していくのかを一緒に考えることで、学校の中に強力な支援体制を作ることが可能になります。それは、全ての子どもにとって居心地の良い学校、自己肯定感を感じられる学校になっていくことを意味しています。学校という場合は、様々な力を持っていると信じています。所属感やつながりがもてるように、できるだけ多くの先生が笑顔で子どもに話しかけてほしい、そして子どもが大切にされていると感じてほしいと願っています。また、仲間とつながることの大切さも大事になります。そして、子どもの持っている力を引き出し、小さなことでも良いので、きちんと評価してほめていくこと、子どもの有能観を育ててほしいと思います。目標を設定する支援をする、子ども自身がそれを決めていくことを応援してほしいと思います。

それから学校においては子どもの支援だけではなくて保護者の支援も大事な仕事になります。保護者は大人です。大人の回復がとても遅れていると感じます。大人の回復にも学校は重要な役割を担うことができます。地域のコミュニティ、あるいはつながりを失った大人にとって、やはり学校をよりどころとして地域とのつながり、新たな故郷を作りだすことができれば、大人が安定していく。それが子どもに安全感・安心感を与えることになり、心のケアにもつながると感じます。子どもの心のケアのためにできることはたくさんありますので、私は学校にとっても期待しているのですけれども、合わせて先生方自身の心のケアもぜひないがしろにしないでほしいと思います。校長先生方には頑張り過ぎず、抱え込まず、そして愚痴を言える職場環境をつくることをぜひお願いして、お話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

**加藤** 高橋先生ありがとうございました。4人目のパネリストは佐藤正幸先生です。現職の校長先生であり、学校の管理監督者として震災直後からずっと現場から発信なさっていらした先生のご報告とご提言です。

---

## 「未来を見据えて…」

---

**佐藤** こんにちは。気仙沼市立条南中学校の佐藤正幸です。今現在抱え込んでいます。すべての先生方の代表としてのプレッシャーがかなりかかっておりまして、先ほどの本間先生のご講演、それから、今パネリスト本間先生含め3名の方のお話しで今日のねらいは達せられたのではないかと思っているところですが、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

本日ご参会の皆様の中には、東日本大震災時に、勤務校、地域で、あるいはご家族で、そしてご自身が、直接、または間接的に大変な思いとご苦勞をなさった方が大勢います。一方、被災地ではなくて、被災とは無縁で、自分はこれで良いのかと思ひ悩む先生方もいたと思ひます。したがいまして私は、皆様方の代表ということではなくて、本日のテーマについて、私なりの思い、考えを述べさせていただきますことをご了承いただきたいと思ひます。



人は生かされて生きています。生きているということは誰かの世話になっている、生きていくということは誰かに恩返しをしている。私たちは生かされました。生かされたものとして、人や物の命、これを大切にして、智慧を働かせていくことが与えられた責務だと思ひます。

被災地にあつて、あの時の子どもは今、ということを考えてみますと、現在の高校3年生は当時中学1年生、小学1年生が当時2歳でした。被災地における当時の中学生や高校生は惨状に愕然としながらも、避難場所や避難所では大人たちと力を合わせ、目の前で起きている命との

対峙、まさに生き抜く力の実践に知恵を働かせ、人のために全力を尽くしました。我が身を振り返る間もなく。小学生は、地震、その後の津波から命からがら避難し、ただただ目の前の惨劇に恐怖に慄き泣き叫び、言葉がありませんでした。あれから数年たつて、先ほどのお話にもありましたように、ようやくその時の事について心を開き話し始めることができている子どももいます。また、被災地において、震災直後に小学生の子どもへの心のケアを積極的に行わなかった、あるいは取り組まなかった、ということが、その子どもたちが中学校に進んでから、様々な症状や障害が生じ、不登校の一因になった、という例も聞いております。

先ほど、本間先生のご講演にもありましたが、被災地の中で何事もなかったかのように生きる、実は私が勤務した学校でも、父親を亡くした中学生の兄妹がおります。祖父母、母親とともに明るく精一杯学校生活を送っているように見受けられました。しかし、兵庫県からの緊急支援カウンセラーのスクリーニングから、「かなりこの子は病んでいますよ」ということがわかり、教職員で情報共有と共に、カウンセリング等によって心のケアを行ったこともありました。その子は受験期の不安にも、態度、行動として表には出さず、明るく振る舞っていました。もっと早く気付けばと思ひました。

また、家族や住居の流出により、今まで慣れ親しんだところを離れ生活を送っていましたが、移り住んだ土地でうまくいかず、親が離れて生計を営むことになり、被災地に戻つてきて、両親の板挟みになっているという生徒もいます。3月11日が近づいてくると、いわゆる記念日反応を示す子どももいます。家族を失った子、友だちを失った子、両親を失い、いわゆる災害弱者である祖父母や親戚と一緒に生活している子、仮設住宅での生活、運動環境の変化、スクールバス通学での学校生活の時間的な制約、就学援助を受ける児童生徒の増加など、直接的、間接的、地域的な生活環境の急激な変化が、子どもたちの心や体に様々な影響を及ぼしましたし、今現在もそれは続いています。

たとえば、震災前は、「見ざる」・「聞かざる」・「言わざる」で済んでいたことが、震災後は、仮設住宅は一間か二間、隣の声が聞こえる、狭くて薄い生活空間のため、両親や祖父母の関係や家庭の経済面や、これまで見ないで、



聞かないで済んでいたことが否が応でも見え、聞こえその影響のストレスから言わないで済んでいたことを言わなければならなかったり、耐用年数から生じる仮設住宅の劣化と復興の遅れがさらなるストレスを増加させ、再建への意欲を減退させています。

そのような現状にあります。経済格差が教育格差を生まないように、小・中・高・特別支援学校、それぞれに様々な学習支援と言いますか、当然の学習活動が実施されているということは言うまでもありません。

さて、教職員はどうでしょう。事例を挙げればきりがありませんが、先ほど田端先生にお話しいただきましたので、省略させていただきます。ご参会の皆様には、管理職として、第一に児童生徒とその家族の命を心配し、次に教職員、そして学校地域、それから自分の家族、最後にようやく自分自身であったのではないかと思います。

私の心に、ある先輩校長の一言が今でも残っています。「正幸さん、被災地の校長というのは、子どもの前では明るく元気でなければならないのさ。」その先生は、自分の病気を悟り、誰にも迷惑をかけまいと、定年まで任期を7か月残した8月に退職し、そのわずか1か月後に天国に旅立ちました。震災が直接影響した病ではありません。しかしながら頑張っていたことは確かです。

1995年の阪神淡路大震災以降、心のケアが注目され、やはり大きな災害の際には現地に心のケアチームが派遣されました。このたびの震災直後から全国の自治体、大学、学会など、精神科医を中止とする心のケアチームが派遣され、本県のスクールカウンセラーとともに、教職員と協力し、児童生徒の対応、そして支援に当たっていただきました。支援と指導に取り組む教職員自身の相談にも応じていただき、大変ありがたく感謝しております。身体的な不定愁訴から、経済的不安まで、被災者の抱える多様な不安の解消に向け、まだ支援の継続が必要と感じており、要請をしているところではあります。この場をお借りいたしまして、今日ご参会の800名を超える皆様とともに、改めて、支援の継続をお願いしたいと思います。

ただ、この支援はいつまでも続くというわけではありません。宮城県内で自分たちで再建に向けて頑張っていこうというシステム作りが大

切と思います。合わせて、幼・小・中、高・特別支援学校の連携も不可欠なものと思います。

ちょうど時間になりました。校長のリーダーシップと言いますが、私は校長としていつも思っていることは、何事も、その立場に立った者しか本当のところは分からない。でもすべてその立場に立つことはできません。大事なことは、分かろうとする気持ちだと思います。分かろうとする、気持ちが、その気持ちを持つことが大事だと思います。

被災した児童生徒の主体性を最大限に尊重しながら、見守り、寄り添う気持ちを持ち続けたいと思います。本当は思い出したくないし、口に出したくもない、でもそれは逃げることでもあると思います。やはりそれを乗り越えていかなければならないと思っています。ガードを固めてばかりいないで、リスクを覚悟で打って出れば得るものも大きいと思います。失ったものは大きく、耐えがたく、尊いものですが、得たものもたくさんあります。

今あること、ものを生かして、子どもたちの未来に向けての再生に、子どもそして私たちそれぞれが一步を踏み出せるよう、子どもにとって後押しではなく、共に歩んでいきたい、歩んで参りたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

**加藤** 佐藤先生ありがとうございました。短い時間ではございましたけれども、4名のパネリストの方々から、それぞれのご提言をいただきました。

ここからは、フロアの皆様からご質問やご意見などを頂戴したいと思います。いかがでしょうか。お手が挙がりまして、お願いします。

**庄子** 白石市立白川中学校の庄司毅と申します。



4名のパネリストの方々からそれぞれの専門的な立場でお話いただき本当にありがとうございました。聞いていて、心に響くところもありました。4名の方にアドバイスをいただきたいと思っています。

子どもたちの心の復興のために、管理職として心掛けてほしいこと、あるいは心掛けていることなどがありましたら、簡潔にアドバイスをいただけたらと思います。よろしくお願ひします。

**加藤** ありがとうございます。それでは、一言ずつ、それぞれの立場からお願いいたします。

**本間** 私が一番大事だと思うのは、管理職の方は外の世界とつながってほしいことです。つまり、学校だけですべてを片付けるということには限界があります。対応の難しい子どもが発生した時に、学校の機能で全部対応していくというのは無理があります。そういった時に外の資源とつながる、外の相談するところを持つことがとても大事なことだと思います。

宮城県では、先ほどのスライドでも示したように、子ども総合センターには学校の先生が5人配属されています。児童相談所にも10名位が配属されています。保健福祉部と教育庁の連携が、このぐらいとれている県はないです。ぜひとも、学校でお困りの時には、外とつながる、特に管理職の先生が外とつながる役割を持って、渉外係というか、外と混ざり合い外とつながるといふ点が、管理職の先生の一番大事なテーマだと思っています。

**田端** 今の本間先生とかなり重なる部分がありますけれども、ある被災地の校長先生の言葉が印象に残っていました。「地域あつての町あつての学校だし、学校というのは地域ということで、地域とのつながりが災害時に生きた。そして、また心の復興の教育のためにも地域との連携が必要だった。」これは被災した学校ばかりではなくて、被災していない内陸部でも同じだと思います。その地域との連携の一つに防災訓練、危機管理ということを、地域を巻き込んで、学校が災害拠点となってしまうけれども、災害拠点という意識を持って、地域を巻き込んで防災訓練をするということも一つあると思います。

それから、地域の文化を掘り起こしていくこともぜひやっていただきたいと思っています。

**高橋** 本間先生と田端先生から、地域も含めて外とのつながりのお話が出ましたけれども、私は校内連携ということをお話ししたいと思っています。

スクールカウンセラーとして学校を訪問して、担任の先生がいろいろ困っていたり、悩んでいても、カウンセラーに相談しにくい、あるいは「そんなこと担任一人で解決できないのか」と思われてしまうことで、なかなか相談にみえられない先生方がいるように感じております。校長先生が「気軽に利用して来い」と一言言っていたらいいなと思っています。

**佐藤** 三つ、私の場合お話ししたいと思います。

一つは柔軟性を持つ。これは震災後、例えば区域外通学が震災以前と違って多くなりました。それから、スクールバス通学も多くなりました。また地域の状況が一変しており、例えば、社会体育施設がなくなって体育館の解放や、校庭に仮設住宅がありますが、むしろ校庭の仮設住宅に関しては少なくとも私が勤務していた学校、あるいは私たちの町気仙沼では「早く出て行ってほしい」と生徒は思っていません。狭いながらも頑張っています。200メートルのトラックが取れなくても運動会を実施します。部活動も行います。工夫しています。仮設住宅があることをむしろチャンスだと捉え、仮設の方々との交流を深めています。これは、現在勤務している条南中学校でも同じです。

二つ目は、生徒指導上では不登校、生徒のトラブルなどを事実だけを見ないで真実を見たいことです。事実というのは、見たあるいは捉えたとおりで。例えば、(叩こうとしている姿)私が高橋先生を叩こうとしていた。今確かに叩こうとしていたのですが、いろいろな角度から見てもそう見える。でも、「ここに、ハエがついていて取ろうとしていたんですよ」ということもあります。確かに、ハエがいました。これは裏付けを必ず取るということです。警察の方は裏を取ると言いますが、事実だけではなくてその裏にあるもの、なぜそうなったのか、本当の中身はどうだったのか、という「問い返す」ことも大事だと思います。特に、様々なストレスを抱えている子がいますので、

そのような対応を大切にしています。

三つ目としては、震災に遭ったから「ああ、いいよ」「勘弁しますよ」ではなく、是は是、非は非であり、「いけないことはいけない」「これはこうだよ」ということをしっかりと指導していく必要があると思います。以上、三つです。

**加藤** ありがとうございます。

それでは、他にいかがでしょうか。



**須藤** 美里町立南郷小学校の須藤と申します。

今日は、どうもありがとうございます。

本校は、大崎地区の田園の真ん中にある学校で、平成24年度から私はお世話になっております。大震災では、インフラの大きな破壊はありましたが、概ね学校再開はうまくいった学校です。ところが去年、今年と立て続けに複雑な相談を受けました。

行動化の激しいもので、保護者の方と関係機関とともに考え合いました。その時まで、私はその子たちをずっと見てきたのですけれど、震災との関わりという仮説を立てていませんでした。内陸部にあったためです。ところが、ここにきて問題が深刻化してきて、校長として改めて保護者・家族と面接を繰り返しました。その時、ジェノグラムを見ますと、例えば、関係のある方が沿岸部出身で大きな喪失を体験している。家族にその喪失による影響があり、子どもの症状に出ていることに気づき合いました。「あっこれが阪神淡路で起きた3年後から増大してくる問題の実態なのか」と、今実感しているところです。

本校では小学校と中学校が隣り合っています。スクールカウンセラーが中学校に毎週来ます。小学校には月1回くらいのペースです。そこで、私自身だけの見立てでは危ういと感じ、スクールカウンセラーの方と一緒にケースを見てきました。関係機関と連携した取り組み以後も、定期的な面接、カウンセリングを続けていただいています。

私はここで、高橋先生にお願いというか、今後どのような計画があるのかお尋ねしたいと思います。義務教育課の教育相談事業の最も大きいものの一つがスクールカウンセラーの配置になっていますけれど、小学校では圧倒的に足りないと思います。本間先生はじめ先生方の報告を聞いて、中学校ではその問題が顕在化しやすいから派遣回数も多いと思うのですが、小学校でももっと派遣回数を増やしていただくと、親と早くつながり、親の資質を早く学校が見つかることが出来れば、若い親の養育観を支え幼い子供を早い段階で救うことが出来ると考えています。

そこで、スクールカウンセラーの配置、人数を小学校も中学校並みにしていただければ、ここにいる多くの校長はとても助かるのではないかなと思います。これから本県に起きてくる問題を予測した時に、まさに、そこに一つの希望というか可能性というか、お願いを感じております。教育行政のことですので、この場でお答えづらいとは思いますが、事例としてスクールカウンセラーは非常に有効であることを実感しているところです。

以上でございます。よろしくお願いします。

**加藤** ありがとうございます。では、高橋先生、小学校へのスクールカウンセラーの配置について、よろしくお願いします。

**高橋** スクールカウンセラーを活用していただいて大変ありがとうございます。配置に関しては、実は中学校への配置は平成13年度から毎年のように増やしてきました。小学校への配置は、奇しくも震災の翌年度、平成23年度から行うことが、22年度からすでに決まっていた。震災後のケアに間に合ったとも言えると思います。ただ小学校への配置は市町村単位で、各市町村に何名という配置で23年度はスタートしました。その後、学校の要望も大きく、単独でこの学校にこの方をという配置も進んできています。ただ、これは内輪の話になりますが、スクールカウンセラーの中でも臨床心理士の数は半分少しです。ほとんどの方は準ずる方か、心理のトレーニングを受けていない方です。さわやか相談を経験された方とか地域の相談を経験された方がほとんどの割合で、退職した校長先生方がかなり多くなっています。臨床心理

士の数がなかなか増えません。それは、先ほどご質問された先生のお話にもありましたように、行政の問題もありますが、何しろ単年の雇用で不安定な身分ですから、何年か経験された方はもっと安定した職場の方に抜けてしまう事があり、今スクールカウンセラーをしている臨床心理士は100名を少し超える位の人数です。頭打ちでそれ以上増えないので、その人数で小中高全部をまかなっている現状です。その方々も児童相談所の勤務をしていたり、不登校相談センターの勤務をしていたり、教育事務所の勤務をしていたり、掛け持ちで仕事をしています。ですから、なかなかスクールカウンセラーだけを毎日仕事にしている方は増えていない状態です。

私自身も、今は小学校のみのスクールカウンセラーをしていますが、以前は高校も随分経験しました。中学校でも経験したのですが、経験すればするほど、もっと幼い時期からの対応が必要だと実感しております。高校に行くと、「これは中学校で何とかしなければ」、中学校に行けば「これは小学校でやっておくべきことだったな」と感じました。今、小学校ではもっと前、「乳幼児期からの対応が必要だな」と実感することがあります。

そういう意味では、小学校の配置はとても重要だと思っております。

今後は、県外のスクールカウンセラーの仲間が減ってくると思われますので、仕組みづくりを考える上で、いろいろな子どもに対応する担当者と問題の程度を見立てる方を分けていかなければいけないと私自身は思っております。今の先生方の対応で良いのかどうか、あるいは外部につなげた方が良いのかどうか、あるいはカウンセリングだけで大丈夫なのかどうか、その判断をする役目の者と、具体的に子どもとどういう遊びをしていきたいと思いますか、学習支援をしていきたいと思いますかという役割を分けていかなければならないと思っております。このような私の考えです。よろしいでしょうか。

**加藤** ありがとうございます。

それでは、わたしからも一つ先生方にお伺いします。中学生や高校生などの思春期以降になると、もともと必要以上にはあまり関わられたくないが、でもどこかでは見てもらいたいという相反するようなところがあります。このよう

な中学生、高校生生徒に対する対応の配慮や工夫について、本間先生、高橋先生、佐藤先生、何かお知恵がございましたら学校の先生方にお伝えください。

**本間** 一つの例として我々のセンターのクリニックに中学生が紹介されて来ます。その子どもたちは、ほとんどが自分で来たくない子どもたちです。学校の先生達に「行け」と言われて、親から「行くぞ」と言われて仕方なく来るのです。その子どもたちと面接する時に大事なことは、子どもたちが仕方なく来たところを汲むことです。例えば、まずは子どもたちが答えられやすい質問、「今日は、子ども総合センターまで車で来たの?」「電車で来たの?」と聞いたり、あるいは「いつ、お母さんにここに来るっていうこと聞いたの?」など、答えられやすい質問をして「君はここに来たかったの?来たくなかったの?」と聞きます。大部分が「来たくなかった」と答えます。でも、「仕方ないから来た」と、この時期の子どもは強がりを使う。自分の弱さを認めることはとても辛いことです。自分の弱さを認めると自分が崩れてしまうのではないかということで、相談をしたいことをなかなか自分自身で認めない、また、弱さを出すことによって崩れることもあるのです。そのところを丁寧に聞いていきます。

学校の先生であれば、子どもが時々保健室に行くとか、頭が痛いとかお腹が痛いとか、あるいは先生に逆らうとか、その時の気持ちを聞いていくのが一番良い。腹が立っているや頭にきていることは、彼らが一番話しやすいことなので、そこを聞いていくのが良いです。ただ、中には、「なぜ、こういうことをしたの?」と質問がありますが、「なぜ?」という質問は、子どもにとってすごく受け入れにくい質問です。面接の大事なところで、答えられやすいことと、人に頼りたくない気持ちを受け止めながら、頼ってもらうようにします。

もう一つは、このような子どもの場合は親が困っているわけです。受診したいと思う子どもはたくさんいますが、受診したくても、親が働いている不登校の子どもとか、いろいろな問題が起きている子どもは、まず親との関係性を作っていきます。親と何回か面接をすると、やがて子どもも来るようになり、子どもの不安がすくすく解消されていきます。親が少しでも相談

意欲を持つようになると外側から少しずつ子どもも引きずられていきます。

**高橋** はい、本間先生は外部機関で子どもの面接をされていますが、私はスクールカウンセラーとして高校や中学校でお話しをする時は、やはり「相談に来たくなかったよね」ということを大事にします。でも「来てくれてありがとう」ということからスタートします。

そして、やはり大人が批判をしてはいけないと思います。その子どもが、どうしてそのように思ってしまったのかということです。とても重症と言えるリストカットを繰り返しているお子さんたち、あるいは摂食障害などのお子さんたちもたくさん見てきましたけれど、そうせざるを得ない心境というのを必ず持っています。その心境を聞いていきます。「辛いよね」と、「そういうことを本当はしたくなかったけど、しないではいられなかったよね」と、子どもの気持ちを大事にするように接していきます。そうすると、次第に打ち解けて、どんな時にしたくなるのか、あるいはその代わりにどういうことをしたらいいのか、をこちらが命令したり指示したりするのではなく、その子ども自身が考えていくこと、その子どもが出来そうなことに主体的に取り組むことが、一番の解決ではないかと思えます。大人が何かさせようとか、命令をして解決してやろうという姿勢なら、子どもたちは変わらないと思えます。

**佐藤** 心のケアチームが PTSD を中心とする問題が多発するだろうと予測して支援計画を立てて被災地に来ました。ところが、「心のケアチームです」と避難所に行くと、「あっ俺関係ない、俺ちがうよ」「帰らいん、帰らいん」とはつけ（邪魔者扱い）にされた、言葉が悪いですが排除されたと聞いております。「自分は関係ない」という人たちに、そのチームの方が最初から心のケアを前面に出したわけではもちろんありませんが、まずは傾聴するとか、一緒にそこにいることが安心感を与えたいと思えます。それから、今高橋先生も話されましたけれど「なぜ、なぜ」ということは駄目です。自然に話す、吐き出す。自然に吐き出させことで楽な気持ちになる。

その際に信頼関係というのが大切であると思

います。本校の実際の例ですが、弁当持参の日にある生徒が弁当を忘れてきました。朝のうちに弁当を忘れた生徒は手を挙げたのか挙げないのかはわかりませんが、後になって弁当を忘れたことが出てきました。その時に「なんであなた、あの時手を挙げなかったの。卓球大会に向けての練習にも参加させないから」と担任が話をしました。その生徒は楽しみにしていたその練習ができない。しかも、その子の父親は父子家庭で弁当のことを急に言われても準備ができない家庭です。子どもは学校を逃げ出しました。ポイントは手を挙げた挙げないではなく「お昼を食べて午後の活動の卓球の練習に参加するためにどうしたらいい?」「じゃあ、弁当どうする。お父さん持ってくるの、持って来なければ買ってきてあげるよ」と話を進めればいいのに、「なんで、手を挙げなかったんだ、嘘をついた」ところにポイントがいて、生徒も「もういいや」ということになりました。この例のようにポイントや問題をはき違えないところにも信頼関係の大切さがあるのでないでしょうか。「どうせ言ったって」となってしまう言わなくなります。こういうことだと思います。

**加藤** ありがとうございます。田端先生にもお聞きしたいのですが、文化活動の中には心のケアにつながる部分があるというお話ですが、この思春期の生徒たちを文化活動に巻き込む、一緒にやる、これから担う力になってもらうという動きにはどんな知恵や工夫があるのでしょうか。

**田端** 子どもたちを巻き込むという点では、学校の先生は大変うまいです。盛り上げていくということや、直接的に自分の苦しい体験と向き合うこともカウンセリングでは重要であり、それについては先生方が話したとおりですけれど、間接的で一見関係ないことをやることによって、いわば昇華といいますか、別のことによって自分の個人的な苦しい部分を克服していくケースはあると思います。

その非常に間接的な一例が、ある被災地の学校の子どもが大変一生懸命に神楽に取り組んでいてテレビでも報道されましたけれど、その学校の先生曰く「私は神楽をやっていなければ不登校になっていた」と語った中学生がいたそうです。神楽をやる。その中で身体を動かして

祝祭的な身体活動をする。音楽に合わせて高揚して行くわけですが、それと個人的な、主体的なものとは全然一見関係ないかもしれないけれど、子どもの中ではそのことによって何かを昇華できる。そしてまた、文化の中の祝祭を掘り下げていくと地方の苦しみの中でコミュニティが、不作があったり災難があったりした中でそれを乗り越えて、土地の恵みを祝っていく要素を持っていたと思いますが、そこには非常に深いつながりがあるのではないかというのが一つです。

間接性がもう少し弱い連動が見える一つとして、今私が宮城教育大学で対話による思考の深めというものに取り組んでいます。どんな疑問でもいいから子どもに疑問を出させて、その子どもが考えてみたい疑問を、セーフティという何を言っても許されるという対話形式のルールで行う、ハワイで発祥した「子どもの哲学」とか「p4c」と言われるものです。これはセラピーではなく、セラピューティックな、つまり精神療法ではなくて、精神療法的な差異を持っていて、みんなに自分の話していることを認められたり、出される疑問の中で「もしある時期に自分が帰ることができるとしたらいつに帰りたい？」という空想の話の中で、お父さんが亡くなる前に帰ってみたいというようなしんみりした話になっていくことがあるのですが、こういった意外なところからの治療効果というものもあると思います。

**加藤** 他にご質問はどうでしょう。特別支援の学校先生方はいかがですか。

**鈴木** 山元支援学校校長の鈴木と申します。今日はどうもありがとうございました。

本間先生の講演でリスクを抱える子どもに注意をという中で、リストアップしていくことがありました。高橋先生の取組の中にも、心とからだの健康状態に関する個人記録票の作成という話題がございました。子どもの成長を縦に見た時に、被災した子どもが成長していくものについて、しっかりと支援計画を作ることは非常に大切な視点だと考えています。

支援学校では個別の教育支援計画を作って、次に必ず引き継いでいくという取組をしているのですが、この取組が他の小中学校でどの程度進んでいるのか。そして横の部分に、行政がど

のように入っていくことがこれから必要になのかという視点でご意見をいただきたいと思います。

**加藤** どなたにお答えいただくか、ご指名はありますか？

**鈴木** 本間先生をお願いします。もう一点よろしいでしょうか。

レジリエンスという言葉がありましたが、傷ついた保護者とか被災した教員に対してのレジリエンスを高める取組について、この点も本間先生にお尋ねしたいと思います。

**加藤** では本間先生、二つほどよろしくお願ひいたします。

**本間** 特に被災地の子どもたちについては、まだまだ小学校に上がる前の段階で、家が流れた、お母さんの具合が悪かった、兄弟が亡くなった、そのような喪失体験をした子どもがたくさんいます。それを調べてリストにしていく学校は現実にあります。また中には、スクールカウンセラーの面接を受けた子どもを全部リストアップしていくという学校もあります。

つまり、我々は時が経つと忘れてしまいます。大事なことは残しておく作業が必要になります。今小中の連携で大事なものは、小学校の頃のデータを中学校にきちんとつないでいくことであり、絶対必要です。伝えられないことが切れ目を作っていきます。特に発達障害の世界ではいろいろな切れ目が多いです。小学校に上がる時の切れ目、中学校に上がる時の切れ目、そして高校、社会に出る時の切れ目があります。先ほどの教育長さんの話の中にもそのような内容が一部出てきたと思います。

我々は自閉症に関しては、自閉症の療育カルテを作って使ってもらい、切れ目のない情報を確保することを随分推奨して取り組んできました。ですから、そのような取組が少しずつ始まっているところもありますし、もっとももっといろいろな学校で広がればよいと思っていました。

それからレジリエンスのことですが、本当は先ほどの講演の中でレジリエンスのことをお話しようと思ったのですが、時間がなくてできませんでした。学校の先生たちに取り組んでほし

い、あるいは自分のレジリエンスを高める方法は、一番大事なことは笑うということです。笑える場が学校の日常生活の中にあれば、笑うことがレジリエンスをかなり高めます。そしてもう一つは、子どもからのフィードバックです。私たちは仕事をする上で、どこかで褒美がほしいのです。学校の先生にとっての一番の褒美は生徒が成長することです。生徒が先生に対しての良い思いをきちんと伝えてくれた時が、先生にとって一番良い褒美になるのです。そういう点では、生徒の気持ちそのものを上手く引き出すことで、先生のレジリエンスはもっともっと高まる。生徒の有用感ではなく先生の有用感を高めていく工夫が絶対に必要になります。その有用感が子どもからのフィードバックです。その点が大事であると思っています。

そして、先ほども言いましたが、この度の大地震は、学校の先生方がすごい活躍をしました。亡くなった子どもはほとんど学校外だった。学校の中にいた子どもたちは先生たちが必死になって守りました。そのことを生徒が知っています。先生方は振り返ってみるとそのことに気づかれると思う。ですから震災の3月11日のことを時々振り返り、自分たちが役立ったことについて振り返りをするのも自分のレジリエンスを高めることになると思います。

**鈴木** ありがとうございます。

**加藤** そろそろ終了の時間に近づいてまいりました。最後に、僭越ではございますが私の方からまとめて参りたいと思います。

学校の教職員は震災の直後から、学校と子どもを守り、地域に開き、支援に追われてこられました。一日も早く子どもたちのために普通の授業がしたい、日常に戻したいという思いも、先の見えない非日常的な事態の中で、なかなか叶わない時期がたくさんありました。震災1年後位に、ある先生が「町がすっかりなくなり、進学や就職も決まらない中、子どもたちにどうやって将来の目標を持たせてあげればいいのか」、とおっしゃっていたのを思い出します。

大人には仕事が必要なように、子どもには遊び、学び、活動が必要なのだと思います。震災後多くの不自由な状況がありましたし、それは今も続いているという学校が確かに存在しま

す。ただ、教育の場としての建物、設備が奪われても、子どもたちにとっては先生のいる場所はまちがいなく学校であり、養護教諭のいる場所は保健室でした。

震災後、教育は人と人との関係なのだという非常に素朴で、でも力強い事実を感じる光景を幾度も目にして参りました。今年の春、私は震災で親を亡くして、現在は大学生や専門学校生になっている方々と話をしておりました。当時は中高生だった方々なんです、ある学生がこんなことを言いました。「僕はずっとずっと周りの人たちから支えられている立場なんです。だから僕は教師になって還元したいと思っている。」また先週、石巻の合同庁舎に出向いた時に、この春に入職した石巻出身の保健師が働いておりました。また、その日は福島と石巻出身の看護学生が看護実習を行っておりました。震災から4年が経つということは、こういうことが起こり始める時期だということでもあります。こうしたことを、佐藤先生は「恩返し」、「生徒の成長がご褒美」という言葉でお話になりました。同様のことは田端先生もおっしゃっていたとおります。

もちろん震災の体験は決してひとくりにできない固有の体験であり、心の復興の目標やペースも一概にまとめてしまうことができません。子どもは発達しながら心の回復を遂げていくこともありますが、今日、パネリストの話題の中に幾度も出てきましたが、発達しながらようやくその問題を表出できるようになる、ということもあるのだということがわかりました。つまり、被災体験の表出には時差がある、個人差がある、ということに目を向けてあげたいものだと思います。

またそうは言っても、時間の経過とともに各々の被災は表からは見えにくくなるという話も各先生方から出てきました。見えにくくなるだけではなく、私たちが触れにくくもなっていきます。私たちはそのことを極端に触れないでもなく、極端に明らかにするでもなく、その子どもの背後に対するゆるやかな想像力を持って見守り、関わり、日常を繰り返していくことが必要なかもしれません。

このことについて、実は違う言葉ではあります、みなさんが触れていらっしゃるんですが、本間先生は「この子どもにとっての3月11日とはどんなだったかをちょっと考えてみる」と

おっしゃいました。田端先生は、「さりげないケア」という言葉や、先ほども補足していただきましたが「学習活動や文化活動には、秘められたケア機能があることに気づく」という言葉でおっしゃいました。また、高橋先生は「震災の関連があるのではないかと考えてあげる」という言葉でおっしゃいましたし、佐藤先生は「わかろうとする気持ちが重要」とおっしゃったように思います。いずれも、ゆるやかな想像力を持って私たちに見えにくい、触れにくい生徒たちに、それでもなお関わっていくことの大事さを指摘なさっていたと思いました。その意味で、被災地の生徒にかかわる際に、自分自身が直接的な震災体験をもっていないことを案じている先生方にとっても、このゆるやかな想像力を持つことで、実は先生方がなくてはならない力になって、宮城県の子どもたちを支えていくことができるのだと今日確信をいたしました。

震災3年目の時、ある中学校の養護教諭がこんなことを教えてくれました。「この頃、保健室の“ちょこっと利用”が増えているんです。何があるわけでもないのに、身長や体重を量りにくるんです。爪切りを使う。湿布やバンドエイドを貼ってもらいたがる。何となく私の後をついてくる。とつてもわかりづらいが、じっと聞いていると『実は…』という話がある。だからその気持ちで見ようとしないと見えないんです。」ゆるやかな想像力というのはそういうことなのかなと思うのです。

そうした繊細な配慮に留意しながらも、多くの子どもたちは、広い意味では、発達しながら自分を作っていく存在であるということも、今日ここで学ばせていただきました。社会の影響を受けながら、出会った出来事を咀嚼しながら、周りの大人の背中を見ながら、子どもたちは育っていくのだと思います。

「安心できる大人」という言葉で高橋先生はおっしゃいました。私たちは、一人だけの背中では少し心細いのですけれども、ここにいるこれだけの数の背中を合わせて子どもたちに見せていきたいものだと思います。その意味でどの先生もがお触れになった、やはり「連携」という言葉です。学校と医療の連携、学校と心理の連携、学校と福祉の連携、学校と地域の連携。それは子どもたちのためでもあり、また教職員自身のセルフケアのためでもある。そして「そのセルフケアこそがモデルになっていますよ」

と、基調講演で本間先生はおっしゃっています。私たち自身の連携が必要なのだと思います。

震災は、専門家も非専門家も、事態の大きさに皆立ち上がり、自分にできることを探して動いた。そういう「横の連携」の重要さを教えてくれたことでもありました。これは転居や転校という物理的な子どもたちの移動に伴っても、学校を超えて必要になることだと思います。

そしてもう一つご指摘いただいた連携には、学校間にまたがる申し送りの大切さという意味で、「縦の連携」ということがありました。これは最後に特別支援の先生からのお言葉にもありました。時間が経ち、子どもたちの発達に伴って受け継がれていく我々の縦の連携、学校はこれを震災の記録という具体的な形で努力していくことができるし、またそれが求められているのだと思います。この縦・横の連携を駆使しながら、立体的に子どもたちを守り、導く。そんな大人となれるように、本日いただいた多くの示唆を心に留めながら、ゆるやかな想像力を持って、またひとつひとつそれぞれの現場で進んでいきたいと思います。

パネリストの先生方、本日は大変ありがとうございました。

非常にたくさんの示唆がありまして、この場で実らせるには時間が足りなかったかもしれません。これからそれぞれの現場に持ち帰る種として、おそらくは時間をかけてそれぞれの学校で実らせていかれることと思います。

本日は、遠くからお集まりいただいた先生方もたくさんいらっしゃいます。どうぞ気をつけてお帰りください。そして、教職員のセルフケアを大事にしながら、ぜひ皆さんを中心に学校を守っていく力となりますように、それを祈りといたしまして今日は終わりにいたしたいと思います。

ありがとうございました。